このレコードが出来るまで……

四月一日、人も驚くエイプリルフール。コテンサートの前日として、最後のリハーサルをやっている際中、誰からともなく、ニトログリセリンのメンバーから、LPレコードを作ろうと意見が出た。そこでコニサートの調子が良かったら作ろうということになり、ゼニラがSLHの最高級テープを買い求めてきて、ステレオ録音をしたのである。そしてコテンサートは成功の内にあれり、いよいよレコード制作の幕はくだされた。

四月二日、その夜から、メンバーは動いた。パン助がとぶようにして東京に戻り、関人と共に直ぐにテープの編集をし、その間、西尾荘荘のメンバーは、ジャケットつくりと宣伝をした。LPともなるとかなり値を張るので、何枚売れるかが問題である。また、一枚でも多くつくれば、それだけ単価は安くなるので、必死に宣伝した。結果、五十枚ならば確実に売れることがわかった。そこで思い切って百枚つくることにしたのだ。

一方、パン助は東京で制作所を探した。一番最初にあがった所はモノラル録音しかできず、初期はここで我慢することになった。その上、二十七㎝盤であり、単価は千百円と大変安いのである。しかし、折角ステレオで録音むだのに、モノラルでは惜しいということで、探し探して、ついにステレオ録音してくれる民間制作所を発見した。もちろん価格は高くなり、また三十㎝盤となった。五月の初旬に、その富士録音というレコード屋にテープを持ちこんだのである。

六月三日にレコードは出来、東名を通って護送される二人に渡った。ところが、二人もあろうに、その護送車が事故を起こし、斉藤吾朗のレコードは東名の路面に散らばり、割れてしまったのである。そこで、再び、レコードは作り直されることになった。結局レコードは計二百枚作られたことになる。そして、西尾のニトログリセリンの事務所にレコードが到着したのは六月二十三日であった。折しも、斉藤吾朗の実父は名古屋ガニセニタリにおいて、急篤救急に陥っていた、……

斉藤吾朗、現在二十五才。愛知県立西尾高校、愛知県立豊田工業高校、国立科学技術学園高校の非常勤講師として、美術の授業を担当している。斉藤プロダクションの社長、グループ、ニトログリセリンの会長、サークル「二十一世紀」の影の黒幕、一般人協会の会長、独身主義の連合会会長……等を兼務している。池面は「二科展」と「独立展」に出品し、特別は「若葉」「白桃」「朝日能壇」等に発表し、小説や詩は「二十一世紀」「民衆時報」「小説新潮」等に発表し、詩吟は 倉に属し、写真は「二科展」に出品し、各々創作活動に大いに励み続けている。現在、故郷墓集中。資産ナシ。

ニトログリセリンの次の仕事は、山本正之氏の作品「さよならしのレコード化と、「若者の芽と賜し(面面象ケーマソニング)のレコード化である。このレコードは九月中旬、西面象を記念して売り出される予定である。

このレコードにかかった費用

- レコード制作代百枚　十三万円
- SLHテープ代四本　八千円
- ジャケット用紙代　四千五百円
- ライン代　二千五百円
- 写真撮影代　二万二千円
- その他の地費　二千円

合計　十七万円（百枚分）

制作 仁渡路晃離世輝
出版 斉藤プロダクション